

着地なきランナー

冷たい石のベランダに置かれた

素焼きの鉢の折鶴蘭

暑い夏の日差しを受けて

ランナーを触覚のように走らせる

視覚無き生物体が風に揺れながら

空をまさぐり地面を求めて

当て無き成長の旅に出る

湿った地面の匂いがあれば

小さな葉も兆し

時には迷路に咲いた白い花を付けることもあるが

自分の鉢に戻ることも成らず

どこまでもコンクリートとタイルの世界の

土と名の付くものは狭い隣の鉢のみだ

やがてランナーの長く伸ばした首は
力なく垂れ老い枯れて

黄色く堅くなる

葉も消え迷い咲きの白い花も萎み

死へと旅立つ

着地の当て無く伸び続ける若きランナーたちは
先に行くものの末路を

目の当たりにしつつ

冷たい水と土の匂いを求めて

生の旅路を夢見続けるのだ

(2001.7.4)